

自己免疫疾患の発症に関する免疫研究

～Regnase-1 による mRNA 安定性制御を介した活性化制御～

7 月 22 日 (月) 17:30～18:30

大阪大学銀杏会館 B 会議室

大阪大学 老年・腎臓内科

植畑 拓也 先生

植畑先生は IFRcC 審良静男教授の下で、獲得免疫系の中心である T 細胞において Regnase-1 というタンパク質を特異的に欠損したマウスを作成することに成功し、Regnase-1 が T 細胞の活性化の調節に重要な因子であることを証明しました。さらに、T 細胞における Regnase-1 が自己免疫疾患発症に大きく関与していることを世界で初めて証明し、研究成果が Cell 誌に掲載されました。

遺伝子発現において転写後制御は転写制御とともに重要な制御機構です。特に mRNA の安定性制御は遺伝子発現を迅速に誘導または収束させるために必要であると考えられています。これまでの研究において、Regnase-1 が IL-6 などの mRNA を不安定化するヌクレアーゼであることが証明されました。一方、Regnase-1 ノックアウトマウスは激しいリンパ球の活性化を伴う自己免疫様疾患を自然発症しますが、その発症メカニズムはよくわかっていません。

本セミナーでは、T 細胞における Regnase-1 の役割について詳細に検討した結果について紹介します。

略歴

平成 16 年 3 月	大阪大学医学部医学科卒業
平成 16 年 5 月	大阪府立急性期・総合医療センター 研修医
平成 18 年 4 月	大阪府立急性期・総合医療センター 腎臓・高血圧内科レジデント
平成 21 年 4 月	大阪大学医学部附属病院 腎臓内科医員
平成 25 年 5 月	大阪大学大学院医学系研究科 博士課程修了 (IFReC 審良静男研究室)
平成 25 年 6 月～	大阪大学大学院医学系研究科 老年・腎臓内科 研究員

主 催：PET 分子イメージングセンター

連絡先：06-6879-3461

info@pet.med.osaka-u.ac.jp

<http://www.pet.med.osaka-u.ac.jp/index.html>